



今月のことば 令和5年(2023)2月 <No.198>

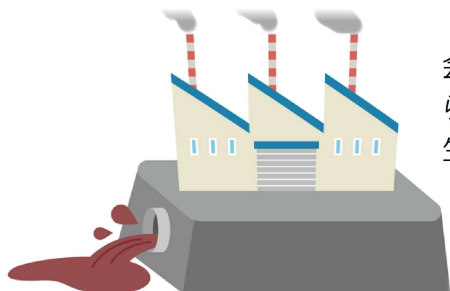
阿弥陀さんはどんな顔



『肩書のない人生』(弦書房より)

今月は、昨年末に92歳で亡くなられた思想史家の渡辺京二さんのことばから。渡辺さんは、故・石牟礼道子さん(作家・詩人・環境活動家)の執筆活動を支え続けたことでも知られ、共に水俣病の裁判闘争に深く関わっていました。

自然を壊し、人間を壊し、海と共にある豊かな暮らしを壊したチッソによる有機水銀汚染。渡辺さんは、なんの落ち度もない水俣の漁師たちが、身体に取り込まれた毒によって人生を・命を奪われていく姿を目の当たりにしてきました。



その原因を作ったチッソは、プラスチックの原料を生産する会社でした。原因が特定されるまで、毒は何年も垂れ流し続けられました。そしてその先には、プラスチックを使った便利な生活を享受している、多くの人々・私たちがいたのです。

人間の無自覚な業に絶望しながら、闘い続けた渡辺さん。たどりついたのは、親鸞聖人が語る阿弥陀如来の救いでした。

NHK 『こころの時代 小さなものの声を聞く～思想史家 渡辺京二～』インタビュー より

衆生を全部救いたい。こう阿弥陀さんは願いなはったから、お前たちはそのまま全部助かっているよ、とこう親鸞さんは言っているわけだ。…

じゃあ親鸞さんの前に出てきた阿弥陀さんはどんな顔しとったのか。どんな姿しとったのかと思うとき、結局この世の実在世界の形をととったんじゃないかね。つまり言ってみれば山河というか、山あり川ありね。花が咲いとるし、虫もおるわけたい。風も流れとるわけたいね。そういう実在世界、それが阿弥陀さんなんじゃないかねえ。

だからこの実在世界の中の一人の存在として、お前はそれで肯定されてんのよ、ということになるんじゃないかと思うんですね。…救いというのは、そういう実在世界の中でほんのちょっとの間ね、滞在を許される。…無数の生命の繋がりがひしめいているわけね。自分はその中の存在だっていうことで、それが本当にみえてきてね、「いいじゃないか、それで」と思うときに阿弥陀さんが出現するわけでしょう。そうじゃないかと僕は思うけどね。

「親鸞聖人の前に出てきた阿弥陀さまの顔」は、あくまで「南無阿弥陀仏」のお念仏だと、聖人自身はご書物やお手紙の中で繰り返し述べられています。ただそれを置いても、渡辺さんの「解釈」には、私たちに強く訴えかけてくるものがあります。

その理由は、**悲惨に亡くなっていく方の人生に意味を見出そうとする懸命な思索と、「自らも水俣病を引き起こした文明社会の一員である」という苦しい自覚との狭間で生まれてきた解釈**だからではないでしょうか。同じ文明社会に生きる私たちも、この狭間と無縁ではられません。「阿弥陀さまの救いに会う」とは、ただ楽になることでなく、この狭間に気づくことでもあるといえます。



慧日山 真光寺